



Title	『カンタベリー物語』におけるING形の分析
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 29-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99081">https://hdl.handle.net/11094/99081</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「カンタベリー物語」におけるING形の分析

(An Analysis of ING Forms in *Canterbury Tales*)

加 藤 正 治

1. 序
2. 形容詞句としての現在分詞
3. 現在分詞の分析
4. 動名詞の分析
5. まとめ

1. 本稿においては、チョーサーの『カンタベリー物語』にみられる Ing 形（現在分詞と動名詞）の内部構造を  $\bar{X}$  理論に基づいて分析する。枠組は基本的には Jackendoff (1977) 及び Akmajian, Steele, & Wasow (1979) を用いるが、必要に応じて適宜修正を行なう。まず最初に現在分詞が形容詞句として扱われる可能性を示し、次にそれに基づいて『カンタベリー物語』にみられる現在分詞の分析を行なう。次に動名詞の分析を行なう。

2. Jackendoff (1977) においては、均一的3レベル仮説 (Uniform Three-Level Hypothesis) が提案され、句構造規則の通範疇的な一般化が行なわれているが、同時に、そのような一般化から逸脱する例外的な句構造規則が存在することも示唆されている。そのような規則の一つが動詞由来語形成規則 (Deverbalizing Rules) である。簡潔に言うと、この規則は動詞的な性格を備えた動詞以外の範疇を形成する規則で、動詞という範疇を他の範疇に切り換える規則である。その式型は次のようである。

$$(1) \quad X^1 \rightarrow af - V^1$$

ここで、 $i$  は 0 から 3 までの任意の整数を指し、 $X$  は一応動詞以外の範疇を表わす。 $Af$  は接辞を表わす。Jackendoff はこの規則によって形成されるものとしていくつかのものをあげているが、その中に動名詞と動名詞的前置詞句 (Gerundive PPs) がある。動名詞については後のところで触れるとして、ここでは動名詞的前置詞句について考察する。Jackendoff が動名詞的前置詞句の例としてあげているものに次の三つがある。

(2) John kept Bill *running*.

(3) The sun *rising* in the east is a beautiful sight.

(4) A man *owning* a Cadillac is not to be envied these days.

これらの  $-ing$  形はすべて次の句構造規則で生み出されるとされている。

(5)<sup>1</sup>  $P^2 \rightarrow ing - V^2$

伝統的には、これら三つのうち (2) と (4) は現在分詞とされているし、(3) は対格付動名詞とされている。Jackendoff はそれらをすべて (5) の規則で一括して説明しようとしているわけであるが、伝統的な分類に基づいた代案も十分に可能であり、より説得力があるように思われる。即ち、(3) は動名詞を生成する句構造規則で派生し、(2) と (4) については現在分詞を形容詞句として派生する句構造規則で説明するわけである。

ここで句構造規則について少し述べておくことにする。本稿では句構造規則については大半が Jackendoff (1977) に基づいているが、VP の分析については Akmajian, Steele, & Wasow (1979) のほうがすぐれているし説得力もあると思われるので、それを用いることにする。

(6)  $S \rightarrow NP \text{ AUX } V^3$

$$AUX \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Tense} \\ \text{Modal} \end{array} \right. \begin{array}{l} do \\ \end{array} \right\}$$

$$V^n \rightarrow \left( \left[ \begin{array}{l} +V \\ +AUX \end{array} \right] \right) V^{n-1} \dots$$


---

1.  $P^2$  は  $P''$  のことを表わす。両者には理論的な意味での相違はない。

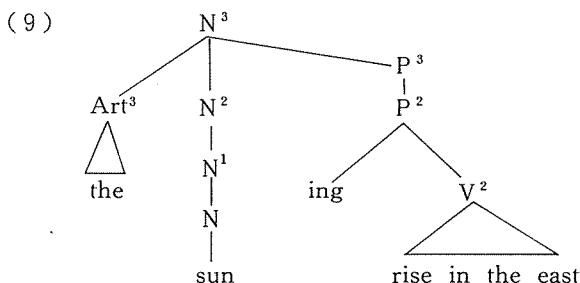
nは1から3までの整数を表わし,  $\left[ \begin{smallmatrix} +V \\ +AUX \end{smallmatrix} \right]$  は助動詞の have, be として実現される。完了の have は  $V^3$  の下に, 進行形の be は  $V^2$  の下に, 受動態の be は  $V^1$  の下に, それぞれ生じる。この分析によると, V が3段階あることになり, Sだけを特別扱いしていることになる。しかし本稿ではSはVの最大投射であるという Jackendoff の主張をとるので,  $S = V^4$  とし, 他の範疇 (N, A, P, ...) も4段階構造であると仮定する。動名詞を派生する規則は次のとおりである。

$$(7) \quad N^1 \rightarrow \text{ing} - V^1$$

また, 現在分詞を派生する規則として次のものを想定する。

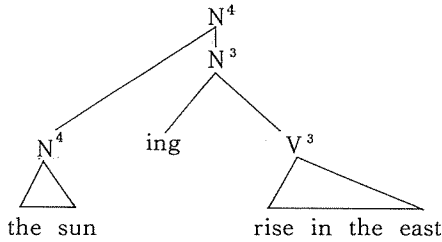
$$(8) \quad A^1 \rightarrow \text{ing} - V^1$$

まず(3)についてであるが, Jackendoff (1977) においてはこの-ing 形を同格を表わす句と交替して生じる  $N^3$  補助部 ( $N^3$  Complement) とする分析をとっている。



しかしこの分析では the sun と rising in the east の間の主述関係が表わせない。というのは, -ing 形が主要名詞 sun の補助部になっているので, どうしても-ing 形は主要名詞の修飾語になってしまうからである。従って, 伝統的な分類に従って次のような分析にするほうがよいと思われる。

(10)



次に(2)と(4)についてであるが、(2)の running を動名詞的前置詞句とみなす根拠として Jackendoff は ① at a run との意味的類似性 ② 主語の欠如 ③ 分裂文にできないということ、をあげている。特に①については、running が場所を表わす表現と述べている。しかし、この議論は、彼が同じく動名詞的前置詞句として分析している(4)には適用できないので正しいとは言いがたい。従って、本稿で提案する形容詞句としての分析の可能性も存在することになる。②については、形容詞句であると分析しても矛盾をきたさない。③についても同様である。下位範疇化については、(2)における running の位置は Jackendoff が提案している V<sup>1</sup> 補助部の句構造規則で説明できる。

$$(11) \quad V^1 \rightarrow V - (NP) - (Prt^3) - ([ -Obj ]^3_{-Det}) \\ - (PP) - ([ +Obj ]^3_{+Comp})$$

この  $([ -Obj ]^3_{-Det})$  は名詞句、形容詞句、副詞句、数量詞句を表わすので、running を形容詞句としても(2)の構造は派生可能である。(4)について、Jackendoff は owning を N<sup>2</sup> 補助部としての前置詞句としているわけであるが、そうすると a dancing girl のような名詞前位の現在分詞も前置詞句として分析しなくてはならない。これは明らかに彼が提案している N<sup>2</sup> の句構造規則とは相容れないものである。

$$(12) \quad N^2 \rightarrow QP - (A^3)^* - N^1 - (P^3)^* - (\bar{S})$$

仮に、名詞前位の現在分詞は(前置詞句ではなく)形容詞句であると分析したり、名詞後位の前置詞句が規則によって名詞前位の位置へ移動したと分析したり、あるいは、名詞前位の位置にも前置詞句を生み出すように(12)を修正す

るとしたところで、これらの分析が説得力に欠けるということは一目瞭然である。一方、本稿の提案によれば、名詞前位の現在分詞は(12)で正しく派生できるので問題はない。問題になるのは(4)の例のような名詞後位の現在分詞である。形容詞の中には常に名詞後位の位置にしか生じないものや、名詞前位と名詞後位とでは意味が異なるものがある、ということはよく知られている事実である。また、形容詞が他の要素と結合して二語以上の語群になると名詞後位の位置に生じるということもよく知られている。

(13) a basket *full of* eggs

このような事実を考慮に入れると、 $N^2$  補助部には名詞後位の形容詞句がなければならぬことになる。そこで(12)を修正して(14)のようにすることを提案する。

$$(14)^2 \quad N^2 \rightarrow QP - (A^3)^* - N^1 - (\{ \begin{smallmatrix} P^3 \\ A^3 \end{smallmatrix} \}) - (\bar{S})$$

この句構造規則によれば名詞前位と後位に二つの形容詞が生じることが可能になる。それによって次のような例が説明できるので(14)に対して強い支持が得られたことになる。

(15) *ancestral* memories *incalculable*

(16) the *mobile* face *frequent* in those whose sight has  
decayed by stages

以上の議論により、(2)－(4)に対して Jackendoff の提案した動名詞的前置詞句は事実を正しく説明できないという点で不適切であり、それに加えてさらに重要なことに、(2)と(4)の現在分詞を形容詞句として分析する本稿の提案のほうがより適切であるということがわかった。よって以下の議論においては現在分詞は形容詞句であるという前提のもとに論を進めることにする。

3. 上述のように、本稿では現在分詞を(8)の規則で派生する。

2. 名詞後位の前置詞句と形容詞句は共起できないように思えるので、  
( $\{ \begin{smallmatrix} P^3 \\ A^3 \end{smallmatrix} \}$ )の形にした。

(8)  $A^i \rightarrow \text{ing} - V^i$

ここで問題となるのは  $i$  の値である。 $i$  の値が大きければ大きい程動詞性が強く、小さければ小さい程形容詞性が強いということである。そこで次例を考えていただきたい。

(17) I slow Sampson, shakynge the piler;

(Knight's Tale 2466)

(18) ..., And sitten there, abidyng Goddess grace.

(Miller's Tale 3595)

これらのイタリック体の名詞句が現在分詞の目的語であることは異論のないところである。従ってこれらは  $X^1$  (この場合、 $X$  は  $V$  か  $A$ ) 補助部ということになる。 $V$  か  $A$  かの決定に関しては次の規則が関与してくる。

(19) *Of*-Insertion (Jackendoff (1977))

$[_{N^1} N - (\text{Prt}) - NP - X] \Rightarrow 1 - 2 - \text{of} + 3 - 4$

OBLIGATORY

これは、いわゆる名詞の目的語といわれるものの前に前置詞<sup>3</sup> の *of* を挿入する規則である。

(20) the destruction the city  $\Rightarrow$

the destruction *of* the city

(21) explanation the conduct  $\Rightarrow$

explanation *of* the conduct

しかしよく知られているように、形容詞も *of* を伴う目的語をとる。

(22) afraid/fearful/desirous/considerate *of* NP

そこで Jackendoff (1977) では名詞と形容詞両方に適用される *Of*-Insertion を提案している。

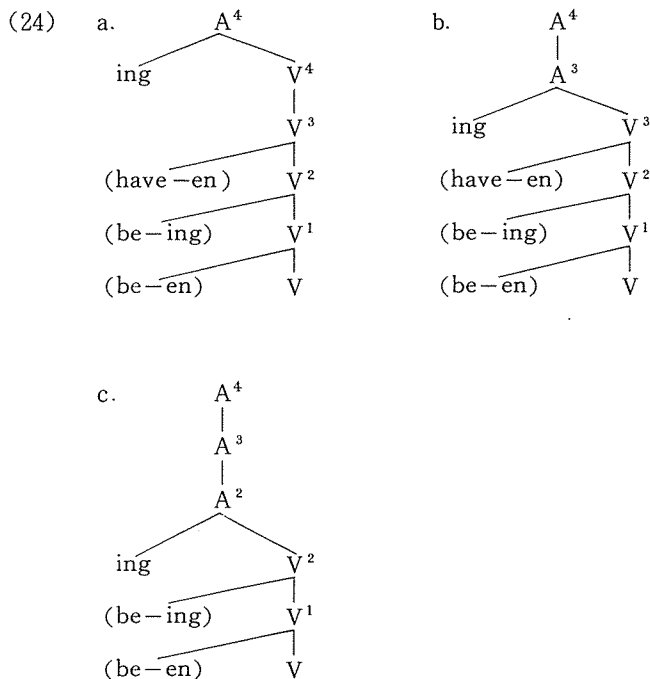
3. Jackendoff (1977) では指定された文法的形式素とみなされている。

(23) *Of*-Insertion

$$[X^1 [ \overset{X}{-Obj} ] - (Prt) - NP - Y] \Rightarrow 1 - 2 - of + 3 - 4$$

OBLIGATORY

このXはNまたはAのいずれかである。N<sup>1</sup>もしくはA<sup>1</sup>の下においてNまたはAの次にNPが生じている場合に of が挿入されるということを表わしている。本稿では現在分詞は形容詞句であると想定し、かつ(17), (18)の例からわかるように、目的語の名詞句に of がつかないのであるから、(23)の規則が現在分詞に対して適用されてはいけないことになる。(23)の規則はX<sup>1</sup>, 即ちA<sup>1</sup>に対して適用されるのであるから、(8)の規則で派生された構造にA<sup>1</sup>が出現しないことが条件になる。従って、 $2 \leq i \leq 4$ ということになる。iが2の場合、3の場合、4の場合をそれぞれ図に描くと次のようになる。





V<sup>4</sup>は、先述のようにSのことであるから、(6)の規則によってTenseもしくはModalと主語のNPが含まれることになる。しかし現在分詞にはこのような要素は生じ得ないので、(24a)の可能性は排除できる。現在分詞の完了時制は中英語においては起こらず、16世紀以降に生じているので、have-enが生じている(24b)も除外できる。従って(24c)が残ることになり、i = 2ということになる。

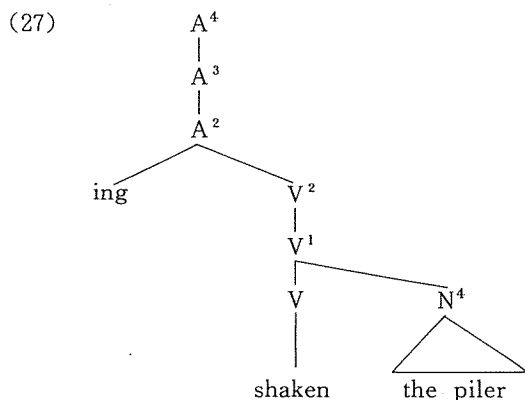
(25) A<sup>2</sup> → ing — V<sup>2</sup>

ここで一つ問題が生じる。(24c)を想定すると(26)のような進行形を含む現在分詞が派生される可能性があるからである。

(26) being V-ing ……

しかし実際にはこのような形態は許容されないものであるから排除する方策が必要である。具体的な方策は今のところ思いつかないが、Ross (1972)において提案されているDoubl-ing Constraintのようなものによって排除できるのではないと思われる。

(25)の規則を用いると、例えば、(17)の現在分詞の構造は次のようになるであろう。



次に(28) - (30)の例を見ていただきたい。

- (28) What maketh this but Juppiter, the kyng, That is  
prince and cause of alle thyng, Converynge al unto  
his propre welle From which .....

(Knight's Tale 3037)

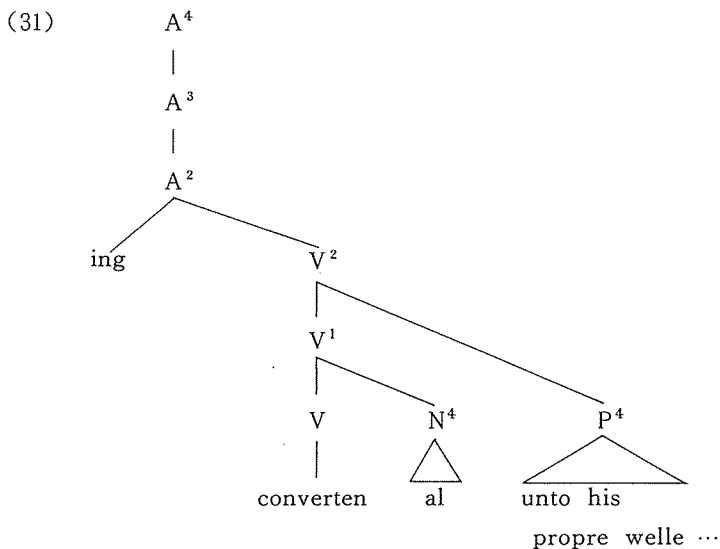
- (29) And in this carte he lith gapyng upright.

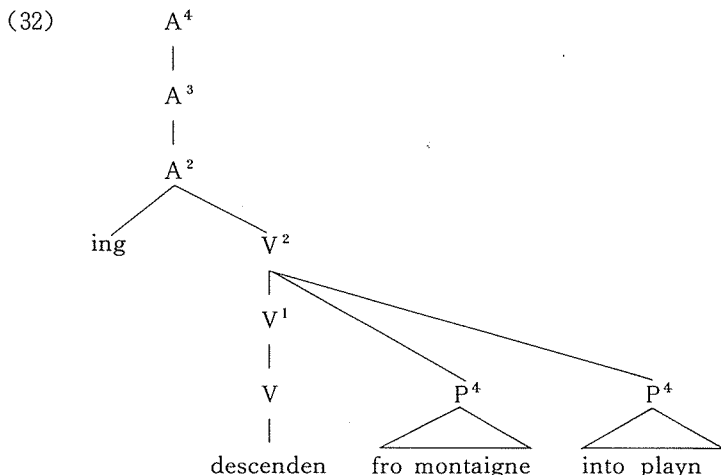
(Nun's Priest's Tale 3839)

- (30) ... As dooth the streem that turneth nevere agayn,  
Descendynge fro the montaigne into playn.

(Man of Law's Tale 24)

これらの例における unto his propre welle ..., upright, fro the montaigne into playn はそれぞれ、 $V^2$  補助部であることは異論のないところであろう。というのも、これらの要素が動詞に対して制限的に修飾を加えているからである。(25)の規則により現在分詞に $V^2$ が生じることは明らかであるから、これらの修飾語の出現は(25)とは矛盾しないことになる。従って例えば(28)と(30)の現在分詞の構造は次のようになる。





以上要約すると、① *Of-Insertion* が適用されない ② 主語や Tense, Modal が生じない ③ 完了時制をもたない ④  $V^2$  補助部をとる、という四つの根拠に基づいて、『カンタベリー物語』にみられる現在分詞の構造は (25) の規則によって派生されることがわかる。

#### 4. 動名詞を派生する規則は Jackendoff (1977) の規則をそのまま用いる。

$$(7) \quad N^i \rightarrow \text{ing} - V^i$$

これは、動名詞とはその内部に動詞句的要素を含んだ名詞である、ということを表わしているに他ならない。 $i$  の値が大きくなるにつれて動詞的色彩が濃くなり、逆に  $i$  の値が小さくなるにつれて名詞的になる、ということである。ここでもやはり先の現在分詞の場合と同じく、 $i$  の値を決定しなければならない。まず次例を考えていただきたい。

(33) Thanne, in *getynge* richesces, ye mosten flee ydelnesse.

(Tales of Melibee 2232)

(34) Afterward, in *getynge* of youre richesces and in  
*usynge* hem, ye shul alwey have thre thynges in

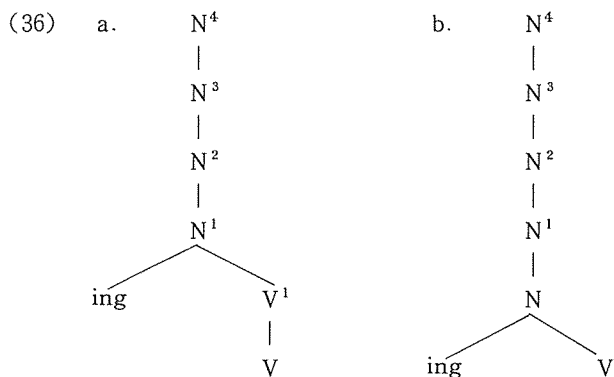
youre herte, ...

( ibid. 2274-5 )

- (35) Afterward, in *getyng* of youre riches and in  
*usyng* of hem, yow moste have greet bisynesse and  
 greet diligence...

( ibid. 2292 )

これらの例において特徴的なことは、動名詞の目的語には of を伴っているタイプと伴っていないタイプとがあるということ、さらに、同じ動詞であっても両方のタイプに用いられ、また同一文中に両方のタイプが現われている、ということである。ということは、この二つのタイプが自由に交替して用いられたということである。まず、of を伴ったタイプについてであるが、これは明らかに *Of*-Insertion が適用されている。すでに前節で述べたように、この規則が適用されるためには  $N^1$  の存在が必要条件となる。従って次の二つの構造がこの条件を満たすことになる。

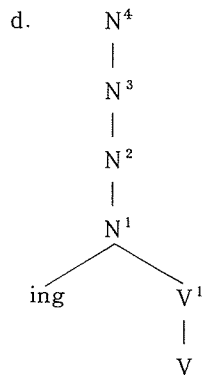
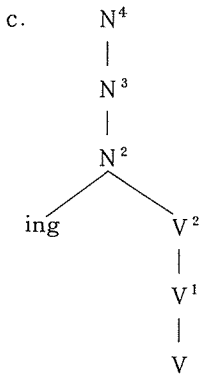
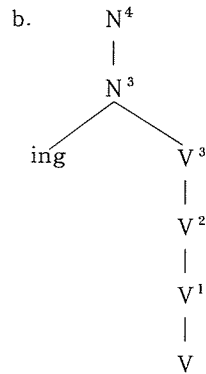
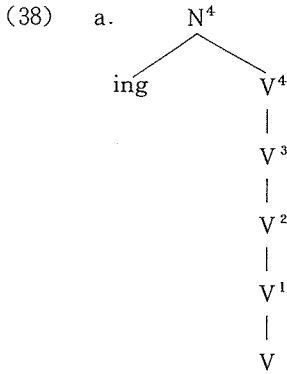


ここで注意しなくてはならないことは、(1)の規則の右辺においては *af* と  $V^1$  以外のものは現われることができない、ということである。従って (36a) における  $N^1$  はその下に目的語に相当する名詞句を生み出すことができないことになり、当然のことながら *Of*-Insertion は適用されないことになる。 よって

(36 b) が求める構造であり、 $i = 0$  ということになる。

(37)  $N \rightarrow \text{ing} - V$

次に of を伴わないタイプについてであるが、これには *Of-Insertion* が適用されてはいけないことは明らかである。従ってこの条件を満たすのは次の四つである。



動名詞に Tense もしくは Modal が現われないということ、及び動名詞の完了時制は 16 世紀以降に現われるということから、 $V^4$  及び  $V^3$  が含まれている (38 a, b) は除外できる。さらに次の例においては、動名詞が形容詞的語句によって修飾されている。

(39) ... And saugh a *litel* shymeryng of a light, ...

(Reeve's Tale 4297)

(40) ... Nas herd swich *tendre* wepyng for pitee As in  
the chambre was for hire departynge;

(Man of Law's Tale 293)

これらの形容詞的語句は機能面から見て、動名詞に対して制限的に修飾を加えていることは明らかである。従って、これらは  $N^2$  補助部であるということになる。先述のごとく、(1) の規則は右辺に  $af$  と  $V^1$  以外のものは生み出さないのだから、 $N^2$  補助部としての形容詞は (38c) には生成されない。従って、(38d) が求める構造ということになり、規則は次のようになる。

(41)  $N^1 \rightarrow \text{ing} - V^1$

次例において前置詞句は、動名詞自体に含まれている動詞的要素と結びついて見える。

(42) But natheless, if thou wene sikerly that the biwreiyng  
of thy conseil *to a persone* wol make thy condicion to  
stonden in the better plyt, thanne ...

(Tale of Melibee 1396)

さらに、この前置詞句は機能の点から言って  $V^2$  補助部であろう。従って、この動名詞には  $V^2$  が現われていなくてはならず、我々が先に排除した (38a, b, c) のような構造になっていなくてはならないことになる。一方、(42) においては *of* を伴った目的語 (*of thy conseil*) があるので、この動名詞は (37) の規則で派生される (36b) の構造をもっていなくてはならない。これは明らかに矛盾である。この矛盾を解く鍵は先述の  $N^2$  を展開する規則にあると思われる。

(12)  $N^2 \rightarrow QP - (A^3)^* - N^1 - (P^3)^* - (\bar{S})$

ここで注目すべきことは、右辺にある前置詞句である。この  $P^3$  は時間、場所、随伴などを表わす前置詞句である。これを用いれば  $V^2$  と  $P^3$  の関係を  $N^2$  と  $P^3$  の関係によって表わすことができる。つまり、この前置詞句が ( $V$  と  $N$  という

範疇の違いはあっても)  $X^2$ の補助部であるということは保持できるわけである。従って(38 a, b, c)のような構造は不要で、本稿の提案どおり(37)の規則を維持できる。

次例においては不変化詞が生じている。

- (43) I swoor that al my walkynge *out* by nyght Was for  
t'espys wenchis that he dighte;

(Wife of Bath's Tale 397)

- (44) And therfore clepeth Cassidore povertie the mooder of  
ruyne, that is to seyn, the mooder of overthrowynge  
or fallynge *down*.

(Tale of Melibee 2176)

これらの動名詞は自動詞から成り立っている。従ってこれまでの例のように目的語をとることはないから、(7)の式の  $i$  の値を決定することは容易ではない。Tense, Modal といった要素, 完了時制, 及び次のような形容詞に修飾された例を考慮に入れると, これまでと同様(37)か(41)で派生されると考えられる。

- (45) Ther saugh I first the *derke* ymaginyng Of Felonye,  
and ...

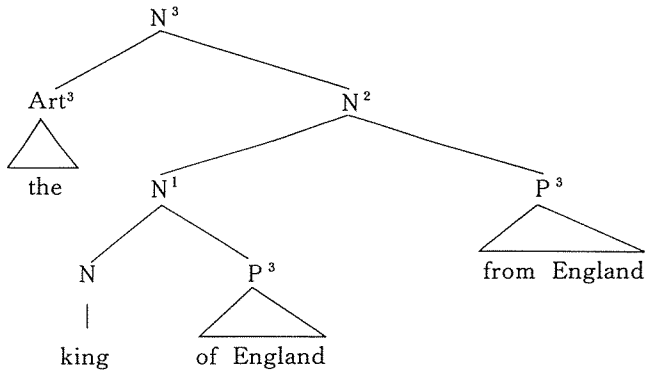
(Knight's Tale 1995)

- (46) And the same bountee in *good* conseillynge of many  
a good womman may men telle.

(Tale of Melibee 1307)

さらにこの例で重要な点は, 動名詞に後続する前置詞句 (Of Felonye と of many a good womman) である。これらの動名詞は自動詞であるのでこの前置詞句が目的語であるとは考えられないが, 機能面から言うと次の of England と同じであろう。

(47) (Jackendoff (1977))



従ってこれらの前置詞句は  $N^1$  補助部と考えてよい。そうすると、(45)、(46)の動名詞は(37)の規則で派生された(36b)の構造をもつということになる。このことから、少なくとも(36b)の句構造規則によって派生される自動詞由来の動名詞が存在するということがわかる。不変化詞に話を戻す。(43)、(44)の動名詞が(41)の規則で派生されたとすると、 $V^1$ が生じているので、 $V^1$ 補助部であるところの不変化詞の出現を説明するのは容易である。もし(37)の規則で派生されたとすると、 $V^1$ が生じないので説明が困難であるように思われる。しかし、Jackendoff (1977) では  $N$  の後に  $Prt^3$  を認めているので、もしこの考え方を採用すれば、不変化詞の出現は説明できることになる。

(48)  $N^1 \rightarrow N - (Prt^3) - (NP) - (PP) - ([\begin{smallmatrix} +Obj \\ +Comp \end{smallmatrix}]^3)$

従って、(43)、(44)の動名詞が(37)と(41)のどちらの規則によって派生されたとしても、不変化詞の出現は説明できる。

以上、要約すると、『カンタベリー物語』における動名詞は、① Tense, Modal の欠如 ② 完了時制の欠如 ③ *Of*-Insertion の適用・不適用 ④ 形容詞による修飾、といった根拠に基づいて(37)もしくは(41)の句構造規則によって派生される構造をもつ、ということがわかる。



5. 本稿においては、まず現在分詞を形容詞句として扱うことを検討し、その結果その考え方がかなり妥当なものであるということを見た。次に、それに基づいて『カンタベリー物語』にみられる現在分詞の構造を分析し、(25)の句構造規則によって派生されるということを示した。

$$(25) \quad A^2 \rightarrow \text{ing} - V^2$$

動名詞の分析については、Jackendoff (1977) の考え方に従って分析し、(37)と(41)の規則によって派生された二つのタイプがあるということを示した。

$$(37) \quad N \rightarrow \text{ing} - V$$

$$(41) \quad N^1 \rightarrow \text{ing} - V^1$$

残された問題としては現在分詞・動名詞の受動構造に関する問題がある。

(6)の句構造規則によると、受動態の助動詞 be は  $V^1$  の下に生み出されることになるので、(25)及び(41)によって派生された構造においては当然受動構造が考えられることになる。ところが、『カンタベリー物語』の書かれた14世紀にはまだ現在分詞・動名詞の受動構造が現われていない(15世紀になって現われる)とされているので、矛盾が生じることになる。今のところ受動構造の出現を阻止する具体的な方策は考えつかないので、これは今後の課題になろう。

<1984. 10. 8. 脱稿>

#### 参 考 文 献

- Akmajian, A., S. M. Steele, & T. Wasow. 1979. "The Category AUX in Universal Grammar" *Linguistic Inquiry* X, 1-64.
- Chomsky, Noam. 1970. "Remarks on Nominalization" *Readings in English Transformational Grammar* ed. by R. A. Jacobs & P. S. Rosenbaum, 184-221. Waltham, Mass.: Gin & Co.
- Emonds, Joseph E. 1973. "The Derived Nominals, Gerunds, and Participles in Chaucer's English" *Issues in Linguistics* ed. by Braj B. Kachru et al. Urbana: University of Illinois Press.
- Horn, George M. 1975. "On the Nonsentential Nature of the POSS-ING

- Construction" *Linguistic Analysis* I, 333-387.
- Jackendoff, Ray S. 1977. *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge: The MIT Press.
- Koma, Osamu. 1980. "Diachronic Syntax of the Gerund in English and X-bar Theory" *Studies in English Literature*, 59-76.
- 中尾 俊夫 1972. 『英語史Ⅱ』(英語学大系 9) 東京:大修館。
- 大塚 高信, 岩崎 民平, 中島 文雄編 1959. 『英文法シリーズ』 東京: 研究社。
- Ross, John Robert. 1972. "Doubl-ing" *Linguistic Inquiry* III, 61-86.
- Schachter, Paul. 1976. "A Non-Transformational Account of Gerundive Nominals in English" *Linguistic Inquiry* VII, 205-241.

